「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第 3 回（8 月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

葉子さんとの約束

河北省　楊超

葉子さんと知り合った頃、私はまだ 16 歳だった。私は当時、毎週日曜日に少年宮の日本語クラスを受講していた。陽の光が輝きぽかぽかとしたある日、日本語クラスの小川先生から日本の友達が紹介された。

「楊さん、この子は葉子さんです。一緒に連れ帰ってもかまいませんよ。いいお友達になってくださいね。」小川先生はショートカットの少女を私に引き合わせた。「葉子さん、この人は楊平(注)さんです。」先生は葉子さんを振り返り、日本語で私の紹介をした。私を見る葉子さんの目は真っ黒できらきらと、宝石のように輝いていた。笑顔がとても愛らしく、えくぼが魅力的だった。

葉子さんと親しくなったのは、その夕方、真っ赤な太陽がもう西へ傾いた時のことである。私は彼女を部屋に連れ帰り、椅子に登って、本棚の高いところから箱を取りだしたのだが、その中身が全部ばらばらと床に落ちてしまい、足もとが日本のアニメ本と光ディスクでいっぱいになってしまったのだ。葉子さんは驚いた様子だった。中国の少女がこれほどたくさん日本のものを集められるとは、きっと思いもよらなかったのだろう。彼女の驚きはすぐさま興奮に変わり、膝をついてディスクを 1 枚ずつ手に取り始めた。

「あら、あなたもこの映画が好きだったの？」彼女は急に喜び勇んで顔を上げ、1 枚のディスクを手に日本語で呼びかけてきた。「え、何？分からないんだけど…」私は急に自分が恨めしくなった。葉子さんが言ったことさえ聞き取れないなんて、どうしてこんなに日本語ができないのだろう。私は赤面してしまった。

そうした私の様子を見て、葉子さんは「ぷっ」と吹き出した。彼女は鞄から電子辞書を取り出すと、俯いて何やら細かく操作してから私に見せてくれた。辞書から女声のぎこちない中国語で「あなたも『千と千尋の神隠し』が好きなのですね、私にとっても、一番好きな映画の一つです。」と聞こえてきた。私も電子辞書を通じて「私も。何度も見ましたよ。」と返事した。

私達は顔を見合わせて、急にあははと大笑いし、その夜は一緒にディスクを見た。電子辞書の助けを借りて、私達は意外にも雑談を楽しむことができた。こうして、アニメ映画を通じて、葉子さんと深い友情を築くことができたのだ。

一日は、私たちにとって短すぎた。早くも彼女が立ち去る時間となった。

少年宮の入り口には空港行きの大型バスが止まっていた。葉子さんが小さいかばんを背負うと、きらきら光っていたその目も少し暗くなった。私はしっかりと彼女の手をつかんで、書いておいたメモを握らせた。「私の住所。手紙を書いて。」私はどもりながら日本語の単語で彼女に声をかけた。葉子さんは丁重にうなずいた。

初めて葉子さんから手紙が来たのは、次の年の春だった。日本からの速達には、手紙の他に3枚のきれいに包装されたディスクが入っており、すべて宮崎駿のアニメ映画だった。手紙を開くと、葉子さんのすっきりと美しい筆跡で「私のお友達へ。宮崎駿の新作映画です。きっと喜んでもらえると思います。今は東京に住んでいますが、間もなくまた引っ越します。落ち着いたら、また住所をお知らせしますね。」と中国語で書いてあった。彼女が電子辞書を片手に一語ずつ訳して一字ずつ書き写す情景が目に浮かんだ。

それから3年間、葉子さんの手紙はいつも不意にやってきた。『となりのトトロ』、『風の谷のナウシカ』、『天空の城ラピュタ』…葉子さんのおかげで、私は宮崎アニメ映画のすべての完全版を集めることができた。

しかし、彼女の住居はいつも落ち着いていないようだった。毎回の手紙で一度も詳しい住所を教えてくれることはなかった。

2011年の春が訪れ、彼女の手紙がまだ来ないうち、日本で大地震が発生したというニュースを耳にした。ラジオ、テレビ、新聞、雑誌のすべてが日本の地震のニュースにあふれていても、この異国の友達と連絡をとることはできなかった。その年の秋になっても、葉子さんからの手紙を目にすることはできなかったが、葉子さんが私の中で消えることはないと確信していた。

2012年6月、葉子さんと知り合って6年後、大学3年生となった私は家に帰った。街頭のアオギリは前年の冬に火事に遭って幹が黒々としており、近所の人達は誰も木が枯れたと思っていた。しかし、今は隙間なく緑色の葉がたくさん生えている。間もなく取り壊されることになっている団地で、ご近所さんは多くがもう出て行った後だった。もう惜しむ名残もなさそうだ。我が家が最後の世帯だった。母が階下で片付けをして、午後に来る引っ越し会社の車を待っていた。

私は漫画の本とディスクをすべて出して、きれいに積み重ね直した。ここ数年で葉子さんからもらった手紙を改めて見ると、そのすっきりと美しい筆跡が、また私の脳裏にあの場面を思い起こさせた。葉子さんがうつむいて、電子辞書を片手に、とても真剣に訳して、書き写して…目にかかった前髪をそっと払って耳にかけて…

6月の風がアオギリの葉に吹いて、がさがさと音をたてた。顔を上げると、緑色の人影が裏通りのあの一端から我が家の門まで歩いてくるのが見えた。郵便屋さんは緑色の帆布鞄から包みをひとつ取り出して、母に手を上げている。「楊さんってお嬢さんのご家族ですか？彼女に日本から速達です。」私はたまらなくなって飛ぶように駆け下り、郵便屋さんからそれを奪い取った。分厚い封筒にははっきりと、「東京都港区青山　葉子より」と書かれていた。

(注)楊平は、楊超さんが当時使用していた幼名